

備陽史探訪

受賞記念69号
発行
備陽史探訪の会
福山市多治米町5-19-8
TEL(0849)53-6157

地名アラカルト

「法成寺」の地名について

出内 博都

福山市駅家町法成寺は、中世村落以来のれっきとした地名であるが、この地名は十一世紀に、位人臣を極めて「この世をば我が世とぞ思う望月の欠けたることのなしと思えば」と詠じた藤原道長が、寛仁三年（一〇二二）京都に建てた法成寺に関係ある地名として伝承されている。

この法成寺は藤原氏極盛期のミニユメントとして金堂、阿弥陀堂、五大堂、三昧堂、十斎堂など荘厳善美をつくり、地上の極楽世界とうたわれた寺で、その造営にあたっては諸国に令して、地子官物は怠ってもこの造営は懈怠してはならないと国司に命じて建立した寺である。

これほど有名な寺であるので、同じ地名をもつこの地区は、当然この法成寺に関係するという発想は古くからあったようであり、『福山志料』

にも

「岡ノ堂此所ヨリ大ナル古瓦出ルコトアリ法成寺ト云う大利コトニアリシニアラスヤ」

とあり、これらをまとめて「広島県の地名」（日本歴史地名大系Ⅱ平凡社刊）には

「法成寺の地名は藤原道長の建立した法成寺に関係することが考えられ、当地が藤原氏の荘園となっていたとする説もあるが分明でない。しかし直接的関係は確かでないが、現に岡の堂とよばれ、江戸時代に庄屋を務めた門田家の敷地内から多数の布目瓦が出土し、蓮華文丸瓦当と唐草文の軒平瓦にみえる文様は相当便化しており、平安時代の建築と目され、ここに寺院が存在したことを物語っている」と記されている。

さて、荘園ということになると、『九条家文書』所載の「撰録渡庄目録（以下「渡庄目録」と略）」（嘉元三年Ⅱ一三〇五）によれば、法成寺領として山城国以下一六カ国に

二九ヶ所の荘園、牧が設定されている。その中で、備後国には「備後三条勅旨田四十町 年貢米二百石」とあり、その後、暦応五年（一三三四）の「渡庄目録」では、預所（管理者）として「細工所料所行秀、但辞退之、大外記師利」という注がついている。他の大部分の荘園が「〇〇庄」という地名がついているのに、備後・但馬二国だけが勅旨田とのみしか記していない。その後の文書にも「備後勅旨」とか「備後国皇后宮勅旨田」とかの記述のみで、地名を示す記述はなく、この面から場所を特定することは困難である。

法成寺の荘園として中四国では、出雲・宇賀庄（田一八〇町、米六〇石、筵布二〇〇枚Ⅱ安来市）、隠岐・重栖庄（田三〇町、鉄六〇〇廷）、讃岐・三崎庄塩浜（田三〇町、油五斗）などがある。

勅旨田というのは、主として九世紀に律令体制が緩んで租庸調の税収が破綻してくるなかで、朝廷の財政を確保するために全国的に設置した天皇家の私有地で、開発・耕作の経費は国費で賄い、収益は全額朝廷に上納される土地である。

勅旨田は一応空閑荒廢の地を開墾するのが建前ではあるが、実際には国衙に近い良田を接収したため、人

民の産業の便を奪うものとして延喜二年（九〇二）の荘園整理令によって禁止された。これ以後、国費で開墾し全額収納する体制は崩れ、地方の有力田堵（地主）の開墾した土地を中央の権門寺社に名義を寄進し、自分は現地の庄官として土地を確保する寄進地系荘園の時代にはいり、その荘園が藤原氏に集まり、摂関政治の全盛期を迎えるのである。

こうした勅旨田は、天長五年（八二五）から仁和二年（八八六）までに東は下野から西は肥前まで二一カ所まで四二〇〇町歩におよんでおり、中国地方では備前一五〇町歩、出雲四〇町歩のみである。

このあと九〇二年に禁止令が出され、勅旨田の役割は一応終わるとすれば、法成寺の荘園としての勅旨田の役割はどう考えたらよいだろうか。名称のとおり三条天皇女御（道長の二女妍子）の勅旨、道長の権勢を背景とした三条天皇の後院領としての勅旨田であり、寛仁元年（一〇一七）三条法皇没、万寿四年（一〇二七）妍子没、治安二年（一〇二二）の法成寺金堂供養等から考えると、法成寺の完成時に施入されたものである。いずれにしても、多くの荘園のなかで、勅旨田という名称だけで登録されているのは三庄（備後、

但馬、近江愛智)のみである。普通の寄進地系荘園とは異なり、現地勢力の弱い、殆ど直営に近い荘園とみることができるとはならないだろうか。

地域の自然村落のまとまりもなく、上からの政治的圧力でまとめた荘園であるだけに、在地固有の地名がなじまず「備後勅旨」という通称が用いられ、勅旨田の性格が薄れて後、「法成寺分」という通称が一般化したのではないだろうか。したがって、固有地名を使うのではないから、四〇町歩が一カ所にまとまったものでなく、二カ所に分かれていてもよいことになる。

全国に「ホウジヨウジ」という地名をもつ地域はかなりあるが、この寺と同じ文字の地名は、愛知県西春町のみであった。地名辞典によれば「現在の徳円寺が昔天台宗法成寺とよばれたものによるか」

とあり、法成寺村は近世に数ヶ村が合併してできている。「渡庄目録」にある荘園のうち現在地が分かる一四市町村に、法成寺との関連をしめす伝承・地名・風習・行事などを照会したが、数ヶ市町村から返信があったものの、内容的には参考になることは見いだせなかった。しかし、法成寺という地名が「備後勅旨」という特殊な荘園名と関連することは

おそらくいえるのではなからうか。ただし、この地名がいつ頃できたか、岩成庄との関係はどうかということも考慮にいれなければならない。

この点では、古代郷名の「石茂郷(いわなしごう)」は「石成」の誤りとし、品治郡江良広徳院の山号の「石成山」や「西備名区」の「岩成原」など氾濫原としての土地形成期の自然地名からくる広域の「イワナル」は備南平野一帯の通称であった。こうしたなかから「岩成荘」がいつ成立するか、立荘過程、領主など不明であるが、貞和五年(一三四九)の「長井聖重讓状」には「石成下村地頭職」とあり、室町初期には上村下村に分かれている。上村については至徳三年(一三八七)「天竜寺土貢注文」などにもみえ、鎌倉末期には成立していたと思える。

ちょうどその頃、法成寺を訪れた兼好法師は、滅びゆく御堂の末路が「かばかりあせ果てんとはおぼしてんや」と語っている。この頃勅旨田が岩成庄の一部に組み入れられたと思える。

法成寺という地名は
①「油木八幡神社大般若経卷四一〇奥書」に、寄進・筆者を示すものに「備後岩成庄於法成寺仏撰寺住侶」
□法師応安七季甲大被十三日採筆

良盛」とあり、これは一三七四年で、南北朝末期には、法成寺の地名が成立している。
②文明三年(一四七一)の「尾道西国寺不断経修行勸進并上銭帳」には法成寺衆として

「三百文仏性寺有等古文西林坊慶海」
がみえる。
仏撰寺・仏性寺はどこにあったか分からないが、西林坊は地名として残っている。この後、備後の国人宮氏の一族が土着して法成寺を名乗っている。

寺という「福山志料」に岡の堂の出土古瓦と、「渡庄目録」にある、「一、同末寺」の二面から追究せねばならない。備後における法成寺の末寺には「観音寺、正住(法)寺」の二寺がみられ、古瓦の出土した門田屋敷は南側に数十mに及ぶ土塁があり(一部破壊)、北側には切岸・掘切も想定されるので、近世(一七世紀)門田正豊がここに屋敷を移す以前にしかるべき土塁が居館をかまえていたことがうかがえる。

この地方に古くから勢力を張った桑原氏については、現在の服部大池の中に桑原迫の地名を残している。ここから東の山に通じる道があり、その坂を桑原坂といい、峠を五輪峠

(ごりんだわ)と呼んで、そこに法成寺城という山城址がある。こうした伝承からみると、後に門田屋敷なる地に居館を構えたのは、桑原氏の一族と見ることもできる。

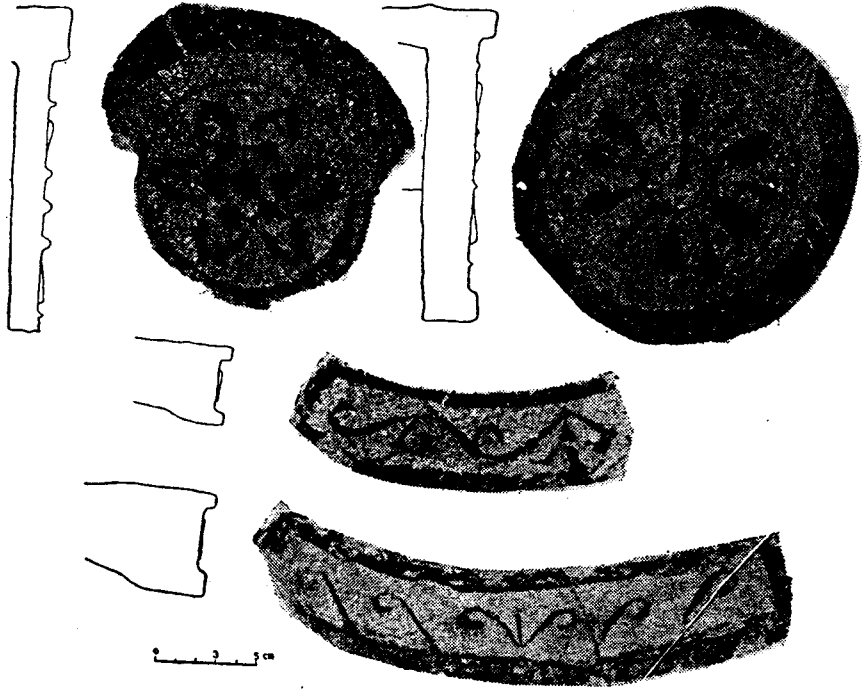
また、この屋敷から西北三〇〇mの尾根の先端に数段の郭をもつ山城址があり、付近に「前城」の地名を残している。この地名は当然北の法成寺城の前城であり、桑原氏が南に進出する過程には当然考えられることである。この時、末寺観音寺(當時はすでに荒廃していたかもしれない)の跡地も居館屋敷に組み込まれたものだろう。

岡の堂から出土した古瓦は次ページ図①に見る如く、極めて簡便化されている。殊に六弁の蓮花は特殊である。国分寺、駅家、官衙に関するものは殆ど、八弁または一六弁であるが、この瓦は二種類とも六弁で、極めて便化されている。六弁であることはこの地方の私寺(且那寺)の一つの特殊性ともいえるのではないだろうか。六弁瓦は熊野の草田第四号窯跡からも出土している(図②)。

また、蔵王の廃海蔵寺址からは七弁九弁のものなども出ており、ローカルカラーがあったのではなからうか。「福山市史」(上巻)によれば、「軒丸瓦も唐草文軒平瓦も極めて便

とあり、さらには
 化されたもので、備後国分寺、そ
 の他の備後南部奈良期廃寺跡出土
 の均正唐草文軒平瓦に比較してい
 ちじるしい便化が目立っている。
 いずれも平安期に下るものではな
 かるうか」

「類似の瓦を求めれば、福山市六本
 堂廃寺、同町大宮瓦窯、津之郷町
 和光寺址などに比することのでき
 る瓦である」
 と記されている。
 したがって「福山志料」に
 「法成寺ト云大刹コ、ニアリシニア

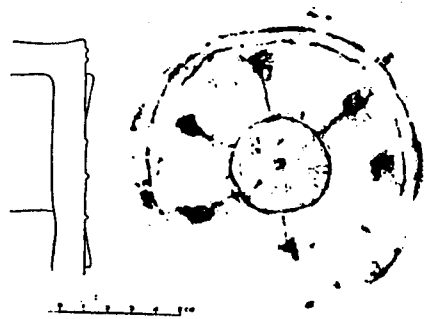


図①魔法成寺址出土軒瓦

図①②とも『福山市史』上巻より

「由緒沿革 観音寺は、年藤原時代
 によって創設されてより、現在に
 至るまで約4年に亘って教義をひ
 め、儀式、行事を行い、檀徒およ
 び信徒教化育成しておる元は檀徒
 寺であって一時栄えたものという」

「浄雲山観音寺は現在、駅家町法成
 寺大字三三四番地にささやかな俗家
 形式の観音堂（本尊）と庫裏がある
 のみである。この寺の昭和四九年九
 月五日付の宗教法人「高野山真言宗」
 代表役員亀山弘応師の文書、宗教法
 人観音寺が宗教団体であることの証
 明書に
 うか。
 替えることができるのではないだろ
 とあるのは、末寺「観音寺」と読み
 ラズヤ」



図②草田4号窯出土の軒丸瓦

「福山志料」に
 「古城 明細書ニ後二浄雲寺と云寺
 ト ナリシ由トアリ」
 という記録があるので「前城」とい
 う古地名をもつ城山である現在地と
 いうことができる。現在境内に残る

とあり、二十余年前に現住職西一樹
 尼によって法人申請がなされたもの
 である。それまではただ「観音さん」
 といって地区の人々の信仰をあつめ
 て講中を作って運営されていた。
 縁日の護摩供養には、尾道、笠岡
 あたりからも信者が詣でて賑わった
 といわれている。一番新しい法印の
 墓石（高さ1mの自然石）に
 「昭和三十五年四月十五日没 龍海
 法印不生位香川県大川郡志度町出
 身 山下秋二郎 行年五十九」
 とあり、三十余年前まで宗教活動が
 行なわれていた。この寺がいつ頃ど
 んな形で存在したか「福山志料」に
 「観音寺 浄雲寺トモ云堂ハ頼レテ
 鐘堂ノミノコル銘ニ浄運教寺トア
 リ」
 とあり、さらに「西備名区」には
 「浄運廃寺跡 今、観音堂のみあり」
 とある。宗教法人申請の時、現住職
 が確認した「浄雲山 観音寺」とい
 古い帳幕を総合すると、「観音寺」
 という寺の存在を認めることができ
 るのではないか。そしてその場所は

とあり、二十余年前に現住職西一樹
 尼によって法人申請がなされたもの
 である。それまではただ「観音さん」
 といって地区の人々の信仰をあつめ
 て講中を作って運営されていた。
 縁日の護摩供養には、尾道、笠岡
 あたりからも信者が詣でて賑わった
 といわれている。一番新しい法印の
 墓石（高さ1mの自然石）に
 「昭和三十五年四月十五日没 龍海
 法印不生位香川県大川郡志度町出
 身 山下秋二郎 行年五十九」
 とあり、三十余年前まで宗教活動が
 行なわれていた。この寺がいつ頃ど
 んな形で存在したか「福山志料」に
 「観音寺 浄雲寺トモ云堂ハ頼レテ
 鐘堂ノミノコル銘ニ浄運教寺トア
 リ」
 とあり、さらに「西備名区」には
 「浄運廃寺跡 今、観音堂のみあり」
 とある。宗教法人申請の時、現住職
 が確認した「浄雲山 観音寺」とい
 古い帳幕を総合すると、「観音寺」
 という寺の存在を認めることができ
 るのではないか。そしてその場所は

古墓碑をみると、高さ一六〇cmの五輪塔(写真①)の方八〇cmの地輪に「元禄五年法印□猛 位導 七月廿日」

とあり、近世になって城跡へ寺ができたという「福山志料」の記録を裏付けることができる。さらに残る二基の墓石(自然石、一m二〇cm〜一m五〇cm)に

「元治元年 新圓寂月山開明禅師芸州加茂郡川尻人也」と

「昭和十一年十二月十四日 自證院 律師法橋實言上人 芦品郡服部村 宇助元産也 俗姓院三實言 行年五十九」

とあり、他に自然石の供養塔(高さ一三五cm、巾七〇cm)にも

「宝永七寅年十月吉辰 三界萬靈 平等利益」

とあることなどから考えて、近世以降、紆余曲折を経ながらも宗教施設として存続したことをうかがうことができる。備後における他の観音寺については、縁起・寺歴があまりかで、末寺としての観音寺には該当しないと考える。

京都の法成寺が没落してからの末寺観音寺はどうであったか、直接わかる資料はない。門田居館が築成される時吸収されたことは古瓦などの出土でうかがえるが、その他のことは不明である。しかし、中世にも「観音」という地名(または施設)があったことは、「元禄検地帳」の



写真① 観音寺に残る五輪塔

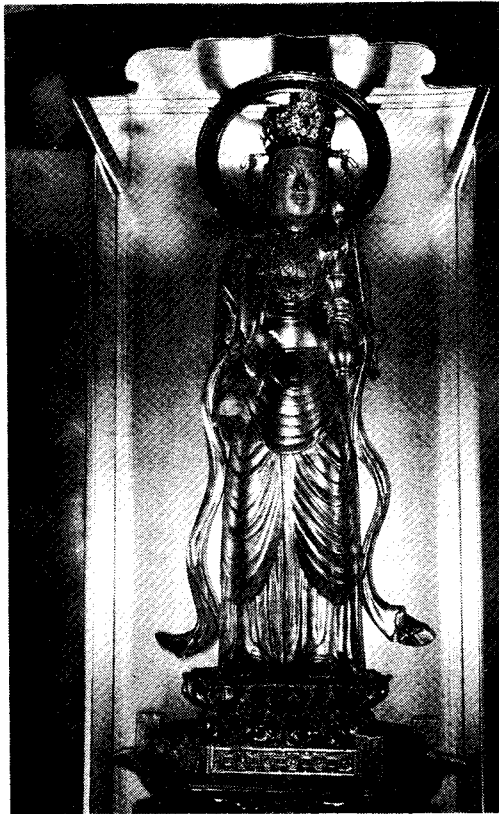
小字のなかに「……とだ 東山田 池口 六反田 しろ田 岡かいち おき谷ガ坪 ぐわんおん 新そう……」

とあり、いずれも現在地比定は難しいが、六反田、岡かいち(岡の堂)、続いている山崎、山神(山の神古墳)などから推定して「ぐわんおん」が現在地の城山でなく、もうすこし南の地にあったことが分かる。最初の寺地が居館になり、その付近にささやかな観音霊場をもち活動を続け、地名を残したと思える。このことは現在の本尊「十一面観音像」(写真②)のなかに秘められているよう思える。

観音信仰のなかで最も早く一般的なのが十一面観音である。浄土に往生を願う阿弥陀信仰が普及する以前の人々の救いは観音様であった。

この仏像は像高七五cm、台座三五cmの小像である。法人認証後、修理し金箔を貼ったので細かい細工の跡はわからないが、頭上の化仏、頂上仏面、変化面の十二面が精巧につくられ、環光背、白毫(瑠璃か)天衣璎珞も一部修理はしてあるが、完全な観音像である。

修理した仏師の言によれば、当時地方ではとてもこれだけの像はできないとのことである。方形で男性的な仏顔が特異で、弘仁仏に近い雰囲気



写真② 十一面観音像

気をうかがわせ、衣紋にある襷も翻波式にちかい手法がみえる。ただ宝冠を後補したので仏像の素朴なイメージはくずれ、金箔の輝きとともに時代を新しくみせるおそれがある。

しかし、これだけの仏像が長年月にわたって田舎の荒れ寺に存在したことに、いい知れぬ伝統と歴史の重みを感じずにはいられない。こうした状況を総合すると、現在の観音寺が法成寺の末寺としての「観音寺」に連なるものとみてよいのではなからうか。

結論として、状況的には法成寺村は京都法成寺の荘園であったとみてよいのではないか。ただ、しかるべき開発領主のいる寄進地系の荘園でなく、既存の公田を勅旨によって設定しただけに、まとまった一地域にかぎらず、固有地名のつけにくい事情があったのではなからうか。

末寺が二ヶ寺あることは、少なくとも二ヶ所に別れていたともみることが出来る。福山市木之庄町の「元祿検地帳」の小字に法成(城)谷という地名があり、そこに正成寺(しようじょうじい清浄寺)という寺があったという伝承のあることは、末寺の一つが正任(法)寺であったという『九条家文書』にも関連する課題であらう。

中央アジアの旅紀行 II

神原 正昭

コクチュベの丘へ

一五時四〇分、アルマトイの町中の中枢部が一望できるコクチュベの丘に着く。ここはアルマトイの北の辺りで、ここから見る町は緑が繁茂し、首都であるため、近代的な建築物が目立つ。道路は見えないが、建物の並びが直行しているのが、町が基盤の目のようになってるのがよく分かる。

少女が二人遊びにきているので記念写真を撮る。ロシアの夏休みは六月一日から九月一日までとのことである。町に近くなるだけで蒸し暑くなる。

アルマトイのバザールへ
一六時四〇分、バザールへ着く。シルクロードといえばバザールが名物である。割合大きめのバザールとのことである。色々な物を買っているが品数は少ない。同じ品物を買っているが値段が違うところが可愛い。冷やかに歩いてみても、ヤポン、ヤポン、と声をかけてくる。ヤ

ポンとは日本のこと。いたって陽気である。このバザールではドル。円は通用しない。

一七時一〇分ホテルに戻る。夕食まで自由行動の時間である。

二〇時夕食、今日の夕食の場所が変更。ユルタレストランで壁画が美しい。食事は昨日と同じようであるが、今日は音楽の生演奏つきである。二三時就寝。

翌日八時三〇分、昨日と同じ朝食である。本日はゆっくりとした朝である。

楽器博物館へ

一〇時ホテルを出発して楽器博物館に行く。今日は現地のガイドさんが来ない。正式には「カザフ民族楽器博物館」という。館のガイドの説明を聞きながら、この辺りの古い楽器から新しい楽器に至るまでのいろいろな楽器を見る。弦楽器のドンブランを初めとして古い琴など弦楽器に特色がある。日本の楽器の母体になる物もあるとのこと。

私は以前、飛鳥の猿石を見たことがあるが、この博物館にも同じような石像があるので写真を撮り団長に説明してもらおう。この石像が飛鳥の猿石などに影響を与えたのであるとのことである。

昨日と同じバザールに行く。今日



写真上 コクチュベの丘にて

はドルを現地の金クスムクに換える。一ドル〇六三・六スム。私は四ドル換えてウォッカニコライ二世ク一本と、残りでアイスクリーム三個買ってホテルに帰った。とにもかくにも物価は安い。

午後からガイドがつく、ガイドは、ジュニアさん(男性) 呑気そうな人である。

中央博物館へ

カザフ国立中央博物館に行く。こ
こは、写真撮影料がいるとのこと。
全員一ドル出して写真撮る。館の
ガイドはバヒケットさん(女性)。
この博物館は中央博物館だけあって、
見応えがある。特に原始時代の収集
品には目を見張るものがあり、それ
だけこの地域に歴史が在るからこ
そだと思う。少しの時間で見られる博
物館ではない。

各時代の展示品も多い。ゾロアス
ター教のオスアリ(納骨器)も数多
く収集している。また中世も考えて
いたより栄えていて、シルクロード
の往来が激しかったようである、私
には今一つ分からなかった。

ゴリキ公園へ

一六時三〇分、中央博物館を出て、
ゴリキ公園へ行く。

現地の人によるとあまりお勧めの
場所ではないらしい。園内に文豪ゴ

ーリキの銅像が立っている。ここで、
全員の集合記念写真を撮る。ここに
も考古学博物館があったが、時間が
ないのでホテルに帰り、アルマトイ
最後の夕食を取る。

夜、ウズベキスタンのタシケント
へ出発するため荷物の整理をする。

二二時、ホテルを出発。このとき
日本でハイジャックがあったとワー
ルドニュースで知らされる。

アルマトイで三日間お世話になっ
た運転手さんに挨拶して別れる。空
港待合室でハイジャックを放送する
かとテレビを見ていたらモスコイ放
送が放映し、オウムとのこと。

出国も結構厳しい。飛行機は満席
に近い。二四時出発。

タシケントへ

一時二〇分、タシケント空港に着
く。機内で待つこと三〇分。私たち
のグループはオリガさんの働きによ
って他の人達より早く出してもら
う。タシケント空港はこの辺りの中心空
港である。それにしてもなぜ夜の夜
中の移動になるのかと考えたが、多
分、独立前は重要な軍事施設があっ
たためではなからうかと思われる。
手続きは、これまた厳しく、多くの
時間を要した。

ここで他のグループ(白人・イン
ド人)から、オリガさんに苦情が出

た。私はどうするものかを見ていた
ら、頑として受け付けず、ロシア女
性の強さを見た思いがした。

二時三〇分、全員荷物を受取り、
迎いのバスに乗る。ここで時差調整
をし、二時間遅らす。

一時三〇分、夜の首都の静かな並
木道を通り、ホテル「ウズベキスタ
ン」に着く。取り敢えずシャワーを
浴びて寝る。毛布は薄くて堅い。グ
リーン色の軍用である。

備陽史ブックレビュー

①備後ゆかりの歴史人物伝

田口義之著

福山リビング新聞社 一八〇〇円

言わずと知れた田口会長著書。

固有名詞では、古代の卑弥呼から現
代の平橋田中まで名を連ねているが、
単なる人物伝で終わることなく、民
俗、風土をも視野に入れて郷土の歴
史を浮き彫りにしているのはさすが
である。一項目約二ページの構成だ
が、少なくとも一個所はなるほどと
納得させられる。大した筆力だと思
う。評者には、備陽史探訪の会入会
のきっかけとなった思い出の項目も
掲載されており、懐かしかった。な
お、この本は会の諸行事で販売する。
売上金は会の収入になるので会員の
皆様にはできるだけ会の行事で買っ

てくださるようお願いしたい。

②北朝鮮は遙かに

新風舎 一三〇〇円

戦後五〇年が過ぎた。今の小学生
には、いや評者にとつてさえもはや
あの戦争は「歴史」の時間に入って

いる。だが、著者のように今もなお
「現在」と捉えている人も多くいる。
引揚者の人々の悲惨な体験は、藤原
てい著「流れる星は生きている」な
どを通して知識としては評者も知っ
ていた。藤原さんの本は感動的、ほ

んど文学に昇華している。反面、
引揚者の本音がダイレクトに出てい
ないように思える。この本は著者の
四年間の日記をもとに綴られたもの
ある面で「恐怖」と「怨念」と「贖
罪」の記録といってもよい。筆者の
体験した事実は重い。しかし同時に、
この地獄を現出させた戦争を起こし
た張本人は日本だったということ、

日本が韓国・朝鮮そしてアジアの国
々に対して行なった収奪や侵略行為
も絶対に忘れてはならない。「歴史
を学ぶ」とはそういうことだと思
う。

③日本史再考

網野善彦著

日本放送出版協会 五五〇円

NHK人間大学のテキスト。網野

さんの本は本当に勉強になる。とに
かく歴史の常識というものがいかに
危ういものであるかを教えてくれる。

このテキストは、ここ数年、評者が疑問に思い続けていたことを解く大きなヒントを与えてくれた。地域史を含めて、中世・近世の真実の姿をあぶり出していくのは、草戸千軒町遺跡を地元にもつ私たちの課題ととらえるべきだろう。とまれ本を買わない人も、火曜夜10時40分からの放送はしっかりと見るようにしよう。

④銅鐸の谷

大野勝美著

名古屋丸善出版 三八〇〇円

昨年評者が読んだ本の中で最も感動した本。もっといえば、じっとしていられなくなった本、こうしてはいられないぞ、オレも何かしなくては、と思った本である。ただし出版されたのは平成六年、しかもたぶん自費出版なので今は手に入らないかも知れない（評者は友人にこの本を教えてもらい、東京の丸善で買って送ってもらった）。それでも特に紹介したのは、ほんとうに驚くべきことに、昨年晩秋、福山市民図書館で、新着図書として著者の贈呈本を発見したからである（いいですか。著者は静岡県在任の方ですよ）。在野の歴史・考古学ファン、研究者の思いの原点がここにはある。文体はストイックに押さえてあるが、熱情はひしひしと……えーい、そんなことはどうでもいい。とにかく読みなさい。

古墳講座Ⅱ

▲実施要項▼

日程 三月二日（土）

時刻 午後二時～四時

会場 中央公民館会議室

講師 山口哲晶副会長

演題 網本善光副部会長

古墳に納められたものⅠ

―武器・武具を中心に―

参加費 一〇〇円程度（資料代）

『古事記』を読む

▲実施要項▼

日程 三月九日（土）

時刻 午後二時～四時

会場 市民会館会議室

（注）中央公民館ではありません。

講師 神谷和孝名誉会長

平田恵彦副部会長

参加費 一〇〇円程度（資料代）

『備後古城記』を読む

▲実施要項▼

日程 三月一六日（土）

時刻 午後七時～八時半

会場 中央公民館会議室

座長 出内博都部会長

参加費 一〇〇円程度（資料代）

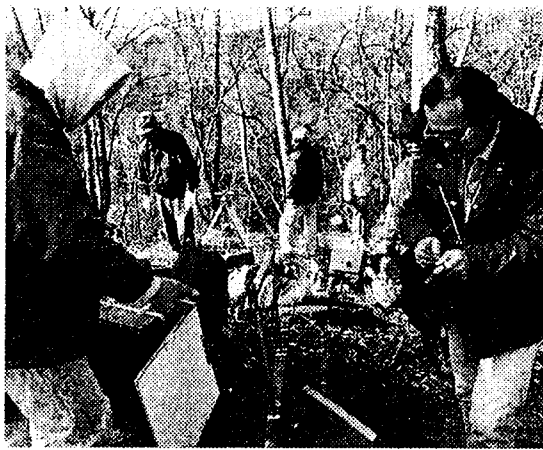
（毎日新聞一月二十八日（日）付記事）

福山の掛迫
6号古墳

備後の歴史ファングループ

電気探査機で本格調査

前方後円墳か円墳かが注目されている福山市駅家町法成寺掛迫の掛迫6号古墳を二十七日、備後の歴史ファン本格的な調査を行った。



古墳の調査をする西口さん（右）とメンバーら
＝掛迫6号古墳で

アンของกลุ่ม「備陽史探訪の会」（田口義之会長）が電気探査装置などを用いた本格的な調査を行った。調査には兵庫縣教委理蔵文化財調査事務所の西口和彦調査専門員はじめ、会員ら四十人が参加。電気探査機で、地中の電気抵抗を測定、同質の地質の分布を調べるなどの調査をした。

同古墳は、古墳時代中期初めの五世紀初頭ごろに築造され、一九五五年に府中高校地歴部が行った調査では、全長は北東から南西に四十六・五メートル、最高部は高さ七メートルとされている。その後、本格的な調査は行われず、同会が昨年十月から、実測などの調査を行っていた。

調査結果は現地でもコンピュータ解析され、分布図が

画面に出されると、会員らは熱心に画面を見つめている。詳細な分析は西口専門

員が持ち帰って行う予定。また、二十八日午後二時から、県立歴史博物館（同市

西町二）で、西口専門員の講演会も行われる。入場無料。

神話のさとと伝説のふるさとを紀行 『古事記』にまつわる比婆連峰

柿本 光明

レンゲツツジやタニウツギなどの高山植物が一齐に開花する六月、若葉がもえはじめの初夏、秋は満山紅葉に色づく…など、山を讚える季節には比婆山は自然美の宝庫だ。

芸備線の比婆山駅から西北八キロの路を別所・田勤・長者原・尺田とゆくと、そこから右に中国自然歩道にはいり、一キロのところにある熊野神社は、比婆山の山上にあるイザナミ御陵を本宮とする拝殿（遥拝場）である。

元明天皇の和銅四年（七一）九月十八日、太安萬侶に勅し、「語り部」稗田阿礼がよむ旧辞を編集した『古事記』のうち、イザナギ・イザナミの伝承の地が東北の地にあり、ことに母神イザナミ陵が比婆山にあると『古事記』に明記してある。

熊野神社は、古代における南口の遥拝所で、これに準じて北、西、東にそれぞれ遥拝所があった。

昔は伯耆、出雲、安芸、備後の人の信仰をあつめていたことは勿論だが、春秋二回の山頂本宮の例祭には約三万人を越える人々が神陵に集まったという。

南の遥拝所、熊野神社は、昔はミコト神社といい、山麓一帯をミコト（美古登）村といっていた。その後、人皇四十二代文武天皇の和銅六年（七一三）までは比婆山大神社とい

っていたが、人皇五十四代仁明天皇の嘉祥元年（八四八）熊野神社と改称された。

『古事記』の火神被殺の一節に「故その神遊りしイザナミの神は出雲の国と伯伎の国との堺の比婆の山に葬りき」とある。この出雲の国は今の島根県であるが、伯伎（ははき）の

国はどこであるかは不明とされるも「母きたれる国↓母なる国↓ハハキの国」と変化したもので、安芸国（広島）と吉備国（岡山）の北辺を

そ、「母きたれる国↓ハハキの国」と察してみるのがいいのではあるまいか。『出雲風土記』に「御坂山は

郡家南方五三三（二二二キロ）、この山に神門あり、ゆえに御坂」とい

とあり、イザナミ神が比婆山の登山口とした「御坂」という所である。

つまり現在の比婆郡小奴可の北の三坂という地にある御坂山（八七八メートル）である。自然石の重つて石

門となっていて、これを神門という。この門はイザナミの神が比婆山の山都に登った坂道であることから「御坂」ともいう。

比婆山は広島県の極北に比婆郡にあり、標高一二五六メートル、竜王山、立鳥帽子、池ノ段、出雲鳥帽子、吾妻山などそれぞれ一二四〇メートル級の峯が連なり、いわゆる比婆山連峰をなし、道後山、帝釈峽とともに国定公園に指定されている。

その景観はまことに雄大で、山頂はゆるやかな草原台地となり、重畳たる山波の彼方に雄峰伯耆大山をのぞむことができ、さらに、出雲平野や日本海をながめられ、中国山地の白眉といわれている。

御陵墓の付近には梅の木が立ちこめているので「梅ノ木御陵」の名がある。梅の木は「一位の木」の別称がある。樹木のうちでも第一位の格式があるので一位の木といわれる。またアララギ、行者ニンニクの古名があり、御神像の彫刻や神官がもつ笏もこの木でつくられる。

御陵石は二個の巨石が重つていて、下になつてゐる巨石は土中からでて、四角、南北に長く、周囲は約一〇メートル、高さは東面約二メートル、西面一・六〇メートル、南面二・二四メートル、北面は〇・八八メートル

ルほどある。次に上石は象形鳥帽子型をしており高さ〇・九〇メートル、横二・四二メートル余。

なにかしら一個の石であったものを割って合せたものようだ。石の下から梅の大株が七株はえていて御陵石の周囲をかこんでいる。その木の間隔も広い狭いはなく、幹の大きさもみな周囲一・八メートルというのも奇妙である。

いちばん頂上には梅の大木があるばかりで、そのほかの木をみることはなく、頂上から少し下るといろいろな木や一帯はブナの原生林が繁茂し、山麓にある熊野神社の境内には樹齡不明の老杉や、尺田の大トチ、川には北方系魚類として珍しいゴキなどの天然記念物が多い。

「ここに御佩せる十拳剣を抜きて後手に振きつつ逃げ来るを、なお追ひて黄泉比良の坂本に到りし時、その坂本にある桃子三箇を取りて待ち撃てば、悉に逃げ返りき」と『古事記』にある神話の地が、比婆郡高野町桃木谷である。

昔から比婆郡一帯には旧暦の八月朔日にはかならず桃の実を食べて邪気をはらわねばならぬ…という土俗信仰がある。これは神代からこの地方に伝わった風習のようだ。「イザナギの尊、遂に所帯せる十

握剣を抜ききてその子迦具土神の頸を斬りたまひきて三段に為す」『日本書紀』の一書である。

比婆山より東へ約二〇キロメートルはなれた東城町小奴可の加谷にある紐解神社（今は金倉神社）には、イザナキ神話の三段山の遺蹟がある。土地の人はクさんだんクと呼んでいるが、この山を東方からみると小丘にしかすぎないが、山の頂上が深く揺られて三段になっている。頂上に登ってみると、古代人の信仰の遺蹟とおもわれるような巨岩、巨石が各所に散在していて、そこには延々とした堤防のごときものがあつたが、それは何の目的で築造したかは不明である。芸備線小奴可駅より二キロメートル。

「女神イザナミは、火の神がカグツチの神を生んだときミホド炙かえて遂に神避りましき」（『古事記』）悲惨事につきものの汚物を洗った池が広島県と島根県との分水嶺で、スキーで有名な三井野原（島根県横田町）にある「稚児が池」がそれである。稚児池は、うち続く埋め立てのため一見小さく見えるが深さは〇・九〇〜一・二〇メートルもあり、底しれぬドロ沼であるといわれる。太古は簸ノ川の源泉である。

お産に関する三井野のことを土地

の人は「御生」とも書いています。木次線油木駅から徒歩で登れる。

比婆山麓にある熊野神社の奥にある雄大な那智の滝を眺めながら中国自然歩道を登りつめると、そこは竜王山（一二五六m）頂である。ここより立烏帽子山（一二八〇m）までには黄泉比良坂・千引岩などとよばれる地がある。

イザナミの命が去りませしとき隠れられた比婆山の石室は六の原川の上流六ノ原部落より左に道をとおり、右に入ると楕円形の穴がある。

だが近年は人も近づかず、樹木が生い茂っているのを探し出すことは困難で土地の方に案内をもとめた。石室の中の話は古老の話を総合してみると、この穴に這い入り奥へ二メートルほど入ると玄室があり、高さは二・三〇メートル、巾二メートル、奥行一〇メートル余である。

この石室は石が硬くて少しも崩れていないという。入口の大きさは大人がらくに入れるくらいで、左下へゆるやかに約三メートル下ると、ここから右に折れ、まっすぐに奥へ一〇メートルすすむと洞窟になっていて玄室内を自由に歩行することができ、水抜きを用意してあるそう。天井、底面は平でなかなか住みよいようにでき、付近には湧水もあると

いう。まだ原始の穴居時代であった超古代では、寒さしらずの理想的な住居であったかも知れない。

イザナギの命が黄泉国を去るとき大急ぎで飛び越えたといえる飛越岩は約一〇メートルもある巨岩で『古事記』に記された千引岩ともいわれている。

さて、イザナギ・イザナミの命が天降りし当時の住居は穴居時代だったことは想像できるが、その時代の遺物とおもわせる大和言葉が残っている。「ツツガナシ・ハイル・アナカシコ」などはその代表語ではな

かろうか。このツツガとは虫の名で毛ダニの幼虫で体長が約〇・二ミリ、身体の全面に赤色の毛が生えており、野ネズミの耳などに寄生する厄介な虫で我々の祖先が住んでいた穴居生活において「ツツガ無し」という言葉は現在でも無事息災のことを「恙なし」といっている。また、這い入るとい言葉も穴居時代に入

口が狭く、這って入らなければ入れない。ことを意味した言葉の名残り

と思える。「あなかしこ」が使われたのは、穴居時代に穴ほど尊いものはない。……の意ではあるまいか。試みに類する言葉を拾ってみるとアナツラハシ（見さげた気持ちにな

い）、アウナシ（深い考えがない）など、穴居時代を連想させるような言葉は多い（古語辞典）。このほか、超古代語や山窩語のなかにも、

これに類する古代語が多くあり、われわれの先祖の生活がしのばれる。

母イザナミをししたう余り、はるばる比婆山を訪れたササノオの命は、中国山地比婆山一鳥髪ノ里一船通山にいたり、八岐の大蛇を退治した。そのとき持っていた剣は天之蠅斬の剣↓大蛇鹿正の剣↓韓鋤の剣↓天之羽斬の剣ともいう。

八岐の大蛇退治は中国山地の鉄の争奪史とも考えてよからう。そのヤマタノオロチであるが、良質の鉄を掠奪するために侵略してきた高志（北陸）の国の軍隊という説があり、鳥髪ノ里一船通山の八合目一鳥髪滝あたりを舞台にしている点に興味がある。鳥髪は船通山と稲田姫の父足名稚、母手名稚の住んでいたと伝える家内住山の中央にあり、高さ二〇メートルで、ヤマタノオロチが居たところと伝わる地である。

このはきはき（母来）の国比婆山をめぐる神話のナゾ、中国山地から奥出雲にかけて残る神話・伝説は、昨年の四・五・六月頃比婆郡各町を訪ねた折現地を訪ね、土地の古老から聞いた話を書き綴ったものである。

大工と棟梁

木下 和司

「大工」(だいく)という言葉の語源を調べてみると、その成立は古代の律令制まで遡る。律令体制下で宮殿及び社寺の造営を掌る官庁として「大工寮」(こたくみのつかさ)があり、ここに属する工匠の最高指導者が「木工大工」(こたくみのおおいたくみ)であった。現在の職制で言えば建設局の技師長にあたる高官で、官位も工匠としては最高の従五位を与えられていた。また、律令体制下では現代の大工にあたる職業は、前述の造営官庁名にあるように「木工」と呼ばれるか、もしくは、「番匠」と呼ばれていた。中世では「番匠」の呼び名が一般的になる。

日本の建築史で言う中世は、一一八〇年の平重衡による南都焼打より始まる。この焼打により焼亡した東大寺・興福寺の再建を契機として、古代建築とは一線を画する中世建築の萌芽が始まると共に、造営組織にも新しい体制が生まれ始める。

平安時代末には律令体制の衰退に伴い、中央の大きな工匠集団は各社寺に抱えられた血縁を中心とする小集団に分裂を始めていた。このため大規模な建築現場では多くの小集団

が集まって造営組織が形成された。多数の小集団によって作られた組織で統一的に仕事を行うためには、階層的組織を作り集団の意思統一をはかる必要がある。ここに中世的な建築造営体制が登場した理由がある。

中世的な造営組織は、建築現場毎に作られる臨時の階梯組織であり、この階梯組織の頂点に立つ工匠の指導者が「大工」と呼ばれた。

古代から中世への「大工」の変化は、建築造営組織の体制変化を伴っていた。また、中世から近世にかけて工匠指導者の名称が、「大工」から「棟梁」へと変化する。古代から中世への変化と同様に、この過程にも造営組織の変化を伴っていた。次項からこの変化について述べる。

中世前期には、工匠達は座をつかって自分たちが働く職場(寺院・神社)を確保していた。しかし、この時代は職場間の行き来が比較的自由であったため、異なった集団と共同で仕事をすることも多かった。また彼等は新しい職場を求めて積極的な地方にも進出しており、中世には地方の名建築が多い。しかし、十四世紀になるとこのような集団間の自由な交流が制限されてくる。例えば法隆寺を例にとり、十三世紀後半以前の工事を担当している工匠名を調

べると、藤井・平・源・三国・丹波・宇治・刑坂・橋等の姓が認められ寺外の工匠がかなりの数参加していたと考えられる。しかし、十四世紀以降になると法隆寺の工事に参画している工匠の指導者は、秦・橋・平・藤原の四姓に限られてきて、寺外の工匠の活躍が見られなくなる。これは、社寺への恒常的な奉仕と引替に造営を独占する契約の成立に起因している。この権利を「大工職」(だいくしき)と呼ぶ。法隆寺の「大工職」の成立は、かなり早い例であるが、以降、同様の独占権が十四世紀から十六世紀にかけて各社寺で成立していく事になる。

「棟梁」の率いる工匠集団は「大工職」が成立した十五世紀中頃からその独占権を脅かす形で登場する。「棟梁」の名称が棟札等に表われてくるのは、十五世紀中頃からで、当初は「大工」の次に置かれたり、並記されたりしている。ところが、十六世紀末になると「大工」は使用されなくなり、「棟梁」がこれに変わる事になる。「棟梁」の率いる工匠集団は中世的な血縁関係を持たず、徒弟制度を基本として恒常的な身分制度を持っていた。さらに、「大工職」による制約を受けず、その技能によって造営組織に参画していたと

考えられる。ここに中世の工匠集団との大きな相違点がある。

ではなぜ「棟梁」は、「大工職」とは無関係に職場を獲得できたのであろうか。これは、中世後期に発展した大名領国制と深い関係がある。大名は、その領国支配において築城・城下町の形成等のために工匠達の技能を必要としていた。しかし、中世後期には「大工職」が存在し、これが大名の工匠に対する直接支配を妨げる大きな要因となっていた。このため、大名達は優秀な技能を持ち「大工職」に縛られない工匠集団を必要としていた。この要求に基づいて創られたのが「棟梁」を指導者とする工匠集団であり、中世的な座の制度(「大工職」)の破壊を目的としていたと考えられる。

「棟梁」は大名の勢力を背景として、「大工職」とは無関係にその技能によって造営工事に呼ばれるためその言葉の中に個人の技能に対する尊敬の念を含んでいる。ここに、古代・中世の工匠集団の指導者を指す「大工」との間の微妙なニュアンスの差が存在する。また、「棟梁」が工匠の指導者を差すようになると、「大工」は現代と同じく建築に従事する技能者を指す言葉として使用されるようになる。

光悦によせて

熊谷 操子

年令を重ねて渋味を増し、その芸に益々磨きがかかり魅力的になる俳優と、それとは反対に若い時の方がずっと素敵だったと思われる俳優が居る。大出俊はどちらかと言えば後者の方ではないかしらと私は思っている。

十五年も前になるだろうか。そのドラマの題は忘れたけれど、大出俊が本阿弥光悦を演じたことがある。

チョン鬚の髪は頭にピツタリ吸いついたように恰好よく、やきものか、または時絵かに没頭していた輝くような切れ長の眼に、なんとなく心をひかれた。そして限らないその息吹きからは、私めの魂まで薫らせるような強烈な何かを感じた。

扮したこの俳優がよかったのか、それ以来本阿弥光悦という江戸時代の人間にゾッコン参ってしまった私である。

光悦は、江戸時代初期の芸術家で、生家は京都の刀剣鑑定の名家とされた本阿弥家であった。七世光心の養嗣子光二の子として生まれ、その号を自徳斎、徳有斎といったが、更に晩年、鷹ヶ峯に太虚庵を建てて

からは、それをそのまま号にしたという。号を三つも持っていたのは、茶道、書道、作陶、絵画、蒔絵、彫刻等、それぞれの分野に使い分けていたのではないかと想像する。

京都の本阿弥辻に住んでいたが、大阪夏の陣のあと（一六一五年）京都に凱戦して来た徳川家康から、並外れたその芸術性を認められ、

「江戸に出て来ないか」という誘いを受けた。けれども光悦はうやうやしくやんわり断ったという。

「それでは辻斬りや追剥ぎの出る物騒な所を広々と取らせよう」というわけで鷹ヶ峯の土地を拝領したのである。時に光悦五十七才であった。

ここに一族と知友を誘って、光悦の芸術村を創り上げた。書院式茶席々太虚庵々を営み、茶道に没頭し、自らが法華信徒であったので邸内に法華題目堂々も建てた。それからというものはいつもここからお題目が流れ、法華宗徒の理想郷にもなったという。

朱印船貿易家の茶屋四郎次郎、尾形宗柏（光琳、乾山兄弟の父）、俵屋宗達、角倉素庵、織田有楽斎、古田織部等と親交があったというから、彼の芸術の中がどんなに広がったかが想像される。

昔ぬらす陽はたゆたいたい
松籟の釜に韻くを
天地のころとよみつ

庵の座にいのち澄ませぬ
したたりてそのながれ
人の世の胸をうるおす

わびさびの境地に徹した晩年の茶人光悦を佐野ときえが作詞したものである。彼が茶道に特に優れた所以は、なんとと言っても先に書いた有楽斎や織部等と親交を深めたことにあると私は思う。今日伝えられている消息の大半が、茶道生活の中から生まれたものであると言われているから、彼がこの道に燃やした情熱のほどが偲ばれる。

また、光二の代から加賀前田侯に仕え、二〇〇石を受けていたという。現在残されている約一六〇通にも及ぶ書状の大半は、前田家の家臣との文通によるものが殆んどであると言われている。近衛信尹、松花堂昭乗と共に、寛永の三筆と謳われるほど傑出していたと聞くから、これらの書状の筆勢にも見事なものが見られるのではないだろうか。宗達下絵といわれる巻物々新古今和歌集々や、和漢朗詠集々を揮毫した一群の遺墨が今に伝えられているが、これら寛永年間（一六二四―二八）の作品には、年号や自号や年令等をはっきり記載したものが多いらしい。大いなる自信のほどがうかがえる。

作陶では、不二、毘沙門堂、加賀光悦、雨雲など、傑作と言われるものだけでも十指に余るといわれる。これら光悦の作品展が、十月十四日から、「蒔絵―漆黒と黄金の日本美」と題して、京都国立博物館で催されているし、また、京都文化博物館では時を同じくして、「桃山の春・光悦展―町衆の信仰と芸術」と銘打って開かれている。国立博物館では蒔絵の名作「舟橋蒔絵硯箱」や、光悦と宗達の合作である「鶴下絵三十六歌仙和歌巻」等々、文化博物館では「黒赤楽茶碗」や「立正安国論」等々が堂々と並んでいるらしい。京都まで足を運べば、これらが目のあたりにすることが出来るというのに、残念ッ。折悪しく右足に災難を受けていて治療のためのギブスが、まるで私の行動を阻止する鎖のように、しっかりと食いついていた。そのギブスをうらめしく眺めながら、切歯扼腕の思いをどうすることも出来なかった。

先日はからずも、竹のデザインという本の中で光悦垣なるものを観た。一般に多く見られる割竹を使つた基本的な遮蔽目的の建仁寺垣や南禅寺垣とは違い、これは雄大な規模

古代深津市を歩んで

岡本 貞子

十二月三日朝八時半、駅前釣人像前集合。古代のわがふるさとを探訪する今朝の空は、雲が行交っていたので合羽をリュックに詰めた。この寒さは徒歩には快適よと、足取りも軽くバスに乗る。間もなくJA蔵王支所へ到着。支所へ荷物を預け、軽装にていよいよ古代深津市へ出発。

の透かし垣でありながら、割竹二枚合わせの組子を矢来垣風に組んだ優雅なものであった。その交叉点は細い藤づる様のものでキッチリと、こぢんまり結んである。その上部は細い竹枝を芯として細割竹で巻いた形の玉縁を掛け、親柱は一方だけで片方は玉縁を自然に丸みを持たせて曲げ、やがて地面につくというような袖垣風である。全長は十八メートルというこの垣は臥牛垣という一名も持っている。なかなか言い得て妙であるし、いかにも光悦ッという感じがした。強さの中にしなやかさも併せ持つ竹の特質を十二分に生かしたこの作品は、光悦の創意によるものと伝承されているそうなる。

日本のルネッサンス人といわれた本阿弥光悦には、生まれつき具わっていた芸術的天分があったかも知れない。また、様々な分野で名を馳せたのは、それぞれの友人に恵まれたという点もプラスしたかも知れない。だがそれにも増して、清貧の中で本人が並々ならぬ鍛錬に、尚その上に鍛錬を重ねた結果が、こうした素晴らしい形になって現れたのだと思う。紫野の大徳寺に近い洛北鷹ヶ峯の光悦寺には、いつか是非お詣りしたいなあと思っている。この興奮のあまり覚めやらぬままに。

坂を上り蔵王八幡神社、宮ノ前廃寺跡へ。このあたりまで古代には穴の海が広がっていて、この小高い丘は港であった由。さまざまに当時を思い巡らした。

さらに坂道を往き、お婆捨山へ。『榎山節考』など、小説としてのみ頭の隅にあつたけれど、こうして実際の史実の場に立つてみると、側々と迫ってくるものがある。

孝霊天皇と築地ケ内。『日本書紀』に孝霊天皇の皇子吉備津彦を西道に遣したとあり、思いは遠くタイムスリップする。少し道路から小道を登ったところに天神社があり、この小さな社がよく残っていたものだと思う。一六四四年、保元の乱に敗れ、讃岐にお流されになった崇徳上皇がその途中、市村の医王寺に逗留なさつ

たという口伝のお寺や、真光寺、仁伍貝塚等、皆古代からの伝承と遺物による證である。

今から一一二〇年も昔、今の農業試験場の地域で塩田が営まれていたとは夢にも知らなかった。当時、この貴重な塩をどんな思いで人々が生産したことであろうか。その生産あればこそ経済の豊かさがあり、古代深津市の基盤を担えたのではなからうか。

上井手川にかかる常夜燈は、海を航行する人々の海神信仰とともに、航行の道しるべとしたことであろう。

宮ノ前八幡神社の辺りが港であった頃、西国鎮衛として市村つなぎに初めて上陸した水野勝成公が、以来三代にわたって芦田川、加茂川、高屋川による三角洲の堆積でできた備後の国を造成干拓して、一望の新田経営を成し遂げた偉業をこの度、つくづく感じた。勝成公は、当時の名僧を招き、寺院を建立し、民意の啓蒙にも努めた本当の名君であると思う。お婆捨山の経塚の故事を聞いても十分領ける。

私の幼い頃、蔵王山は遠く深い山であった。入舟町、御船町、船町など水野氏開削の入江に臨む町々は、木造貨物船で賑わっていた。正月前後には、みかんを山積みした船が入港し、木綿橋という赤いレンガ造りのアーチ型の橋の側には、牡蠣船という船上で一献傾けられる風流な船が、冬の入海に舷燈を映るわせていた。その頃は古老から福山の伝承を聞いたことがあるけれど、今は全くなくなってしまう。温故知新は、必要だと思ふ。

柿の実を真紅に輝かせて夕日が市村平野にかたむく頃、落ち葉焚く煙たなびき、久しぶりのその香りのなつかしさ、土の香り、古代の香の恋しさに、我を蘇らせて家路についた。

あれから四〇〇年後の今、大戦後の農地改革を経たこの市村界限は、造成されてビルとなり、市街となり、都市となっている。

『山城志』

第14集原稿募集

今年度発行予定の『山城志』第14集の原稿を募集します。

原則として日本史・郷土史に取材した論文、随筆、紀行文、小説(審査あり)で、四〇〇字詰め原稿用紙三〇枚まで。第一回原稿締切りは五月末日。予定した量の原稿が集まらなかった場合には、随時原稿締切を繰り下げます。送り先は備陽史探訪の会事務局宛てです。

奈良大和路を旅して

門田 幸男

高天原へ行ってみましたと言いますと、「ウッソー」という声が聞こえてきそうですが、現実に奈良県御所市高天というところがあり、高天彦神社が存在しています。案内板によれば、高天原の王者はアマテラスではなく高皇産靈尊と表示されています。アマテラス以前の王者はタカミムスヒであったというわけです。神話でいう高天原と同一かどうかは調べようがありません。

以前から行ってみたいと思っていたのですが、女房が東南アジアのパック旅行に行くと言うので、チャンスとばかりに大和の国を旅行いたしました。外国は興味なし、留守番なんてばかばかしいとばかり、女房の日程に合わせて六泊七日です。

道成寺（文武天皇と宮子夫人とに深いつながりがあるとか）を皮切りに葛城古道に一日、飛鳥に一日、山辺の道に一日、奈良で一日というように「古事記」ゆかりの地を選んでの旅です。宿の夕食で夫婦づれの方と同席しましたが、夫婦旅にはない自由があって独り旅もまた良しの心境でした。私はグルメ指向ではあり

ませんが、公共の宿を利用した中では新庄町の「社会教育センター」かつらぎ」がおすすすめです。宿泊費に比べて食事が良かったと思います。それから次の日、「信貴山荘」に泊まりましたが、夜景が抜群。函館に劣らぬ素晴らしい夜景で、窓を閉めるのが惜しいくらいでした。

高天原や甘檜丘それに三輪山の展望所からと、ところを変えて大和盆地をくり返し何度も眺めました。古人は何を思っ眺めたのだろうかと思いをめぐらした一刻でした。

香具山にも登りましたが、頂上からの眺めは今一つでした。

登山道に使用済みの女性用品が捨てられていました。「大和には群山あれどとりよるふ天の香具山」と歌われた神聖な山がこのありさまで。今の若い女性は礼儀や羞恥心がなくなってしまうのでしょうか。暗澹たる気持ちになりました。

橿原神宮には行きません。なぜかと言えば、拜ませてやるから有り難く思えの態度が警備員の物腰に見え隠れして嫌なのです。以前伊勢神宮に行ったときも警備がものものしいのと拜所に白布が下げてあって中が見えないようにしてありました。白布が無くても何重にも垣があったので、それ

こそシラケてしまいました。二度と来ないぞと心に決めた次第です。

伊勢に脱線したついでに申し上げますと、天皇の居所は大極殿です。大極とは陰陽に分かれる前の根源の状態です。その根源の神が天皇大帝なのですが、陽の神アマテラスの子孫が陰陽が未分化の神を名乗るのは理屈に合いません。そこで大極（北極星「太一」の神霊）を密かに祀ったのが荒祭宮（内宮の北側）です（吉野裕子著『隠された神々』講談社現代新書）。このため北極星の神霊に食餌を供給されるとされるスプーンの形をした北斗七星の神霊が外宮に祀られることになったのだと吉野先生は推理しておられます。また、「天」の枕詞になっている「ひさかたの」は「瓢形の」と書いたのが始めではないかと書いておられます。瓢箪を二つ割るとスプーンの形になるからです。

さて、豊受大神は丹後国に天から天降った八天女の一人が羽衣を隠されたために一人地上に残り、老夫婦に仕えて穀物を醸した薬酒を造ったので、後世穀物神として祀られるようになったといえます（『丹後国風土記』）。しかし、八天女から一人引けば七人であるし、北斗七星には一つの弱い星（輔星という）があっ

て総数は八星なのだそうです。このように伊勢神宮にも中国渡来の思想が取り込まれていて複雑な構成になっているので何事も深く考察する必要があると思います。

以前、平田氏から詳細な説明があった石燈籠のカゴメの紋章のことで、私の推理を御紹介します。

御存じのように、伊勢には内宮と外宮がありますが、アマテラスは天の神であり、火の神ですから、陽神です。トヨウケの神は丹後から招かれた穀物神、つまり地の神ですから陰神に分類できます。高い塀があるので一般人には見えませんが、内宮の神殿と二つの宝殿の位置は正三角形になっており、一方外宮のそれは逆三角形となっています。この二つの三角形を重ねると「陰陽重ね鱗」という紋章となります。

陰陽について言えば、陰の外宮は北の低地にあり、南側の高台に多賀宮と呼ぶ摂社が、また陽の内宮の北裏の低地に荒祭宮と呼ぶ摂社があります。このように、伊勢神宮の内部も複雑に絡み合っていることがわかります。カゴメの紋章と同じく複眼的思考で対応しなければなりません。ずいぶん横道にそれてしまいましたが、奈良や山辺の道はよく知られているのでまたの機会に譲ります。

私の好きな歴史・時代小説作家アンケート結果発表

ベストテンはこれだ！

作家への総投票総数三二五票中

- 第一位 司馬遼太郎 四一票
- 第二位 吉川英治 三〇票
- 第三位 松本清張 一九票
- 第四位 井上靖 一八票
- 第五位 永井路子 一五票
- 第六位 遠藤周作 一三票
- 第六位 山岡荘八 一三票
- 第八位 新田次郎 一〇票
- 第九位 池波正太郎 九票
- 第一〇位 津本陽 八票
- 第一〇位 水上勉 八票
- 以下参考順位
- 第一二位 大仏次郎 七票
- 第一二位 海音寺潮五郎 七票
- 第一二位 黒岩重吾 七票
- 第一二位 柴田錬三郎 七票
- 第一二位 陳隣臣 七票
- 第一二位 宮尾登美子 七票

ベストテンに入った作家と、その作品の魅力を会員の皆様に電話でコメントしていただきました。会員の皆様はどの作品がお好きですか？（土屋さんは原稿をお送りくださいました。その他の文責は平田）。

《私のこの一冊》

①司馬遼太郎「竜馬がゆく」

岸田操さん（福山市暮山台）

十年ほど前、友人に借りて初めて読んだのがこの作品でした。竜馬が生きて描かれていて本当に感動しました。私はお竜に肩入れしながら読みましたが、同時にお竜が心底羨ましいと思いました。女なら誰でも竜馬に惚れますね。また、そう思わせるのが司馬さんの巧さなんでしょうね。綿密に史料の裏づけをとって、できるだけ史実に忠実に主人公の魅力を描き出す、そんなところにみなさん引かれるんじゃないでしょうか。図書館や書店などでも、他の本も読まなければと思うのですが、司馬さんの読んでない本があると、ついそちらに手がいつてしまいます。こういうのを「病みつき」というんでしょう。

②吉川英治「新書大閤記」

岡田道章さん（福山市南蔵王町）

終戦後、中学生の時に図書館で借りて読んだのが吉川英治の『新書大閤記』。当時日本はまだ貧しくて中学卒業したら半分以上就職する時代

でした。秀吉が裸一貫から身を起して出世していく物語は、私だけじゃなく多くの人を勇気づけてくれたと思います。吉川英治自身もそうした境遇だったからよけいに親近感がわきました。二十歳過ぎてから自分の金で買って二回目を読んだ時は、

仕事やっていく上での上司との接し方、部下の扱い方、つまり人とのつきあい方が勉強になったなあ。実は退職した後もう一度読み直したんですが、その時は批判的な読み方になりましたね。秀吉の晩年は誉められん、人間は締めくくりが肝心、そういうことを学ぶことができましたね。

③松本清張「かげろう絵図」

佐藤壽夫さん（福山市東川口町）

古代史にとっても興味があつて、本当は『古代史私注』が一番好きです。この本はほとんど専門家のレベルに達していると思います。いつてみれば読みやすい専門書ですかね。清張さんの提出したいくつかの新説が単なる思いつきではない証拠に、学者にも賛意を表わす人がいると聞きます。ただ、残念ながら小説ではありません。小説なら江戸天保期、十一代將軍家斉の爛熟した時代を舞台にした「かげろう絵図」がいいと思います。

活躍。正邪の構図は単純ですが、は

らはらどきどきで楽しめます。

④井上靖「風林火山」

土屋大作さん（福山市蔵王町）

この小説を読んだ私は「凄い」と思いました。そして作家の井上靖がすっかり気に入ったのです。「疾如風徐如林侵掠如火不動如山」の旗のもと、戦国大名武田信玄とその軍師山本勘助が憑かれたように近隣の国へ合戦を挑んで行く。そして主人公勘助が自ら謀殺した領主の娘由布姫に対し、思慕の念を抱き続けながら川中島で最後を遂げる。由布姫と勘助のとり合わせはまさに「美女と野獣」。意外な展開をくり返す愛憎の筋書にひかれて一気に読み上げました。私が勤め始めて十年、少々中だるみの時期にこの作品を読んだため、スッキリした気分になりました。井上の歴史小説には「戦国無頼」その他沢山ありますが、私はやはりこの『風林火山』が好きです。

⑤永井路子「美貌の女帝」

藤井節子さん（福山市千田町）

あまり女流作家の作品は読まないんですが、永井さんは別です。お得意な中世だけでなく、いろいろな歴史分野に挑戦して、新しい視点を打ち出しているところがいいと思います。たとえばこの『美貌の女帝』では、元正天皇を主人公に、女帝は中

継ぎの役割だったという定説に反論していらっしやいます。それから、戦後、天皇制の問題点を取り沙汰される頃には『三條院記』を、三鷹事件や松川事件の頃に『応天門始末』を著わすなど、現代の問題を歴史的な事件に託して描く手法を採用されているでしょう。こうしたところにも強く引かれますね。

⑥ 遠藤周作「反逆」

近藤文三さん（福山市駅家町新山）
三年ほど前じゃったが、美星町の史跡巡りをしたとき、この小説の舞台になった小笹丸城へ登ったことがあったが、ほんまにこまい城じゃった。荒木村重自身は信長から逃げ延びて天寿を全うするが、村重の妻のだしや竹井一族が哀れでう。村重は晩年どういう気持ちで生きとったのか。遠藤さんはキリスト者じゃからそういうことに興味があつてこの小説を書いたのかも知れんな。最近読んだのは『深い河』。インドのガンジス河をテーマにしとる。死んだらみんなここに流される。歴史小説じゃないが、まあ読んでみんさい。

⑧ 山岡荘八「徳川家康」

石岡亮子さん（福山市港町）

杉本苑子さんの大ファンのに、ベストテンに入らんのは悔しいねえ。どうして入らんのかねえ。あたしは

小説は女流の方が好きじゃけど、男性じゃあ山岡荘八や吉川英治が好き。初め図書館で借りて読んで、本当に好きになった本だけを買おうようにしとるんよ。『徳川家康』は友達に貸してもうって読んだんよ。あたしはいつも女性や母の視点で読むから、家康より於大の方のほうが気になつてね。二人が離ればなれになるところなんかは涙が出ましたよ。この本は話の中にすつと入っていきける、感情移入しやすいということかしらねえ。読みやすいし、戦国の世の人の考え方もよくわかる。じゃけど、あたしは今の時代に生まれて本当によかったと思うとるのよ。

⑧ 新田次郎「聖職の碑」

上田幸子さん（福山市多治米町）

新田さんの小説は、以前教員をしていたころ同僚に勧められて初めて読んだんですよ。『聖職の碑』は、私自身子供たちを預かる立場でしたからとくに切実感がありましたね。三十代のころ、ウフフ、もうずいぶん昔ですけどね、一時期は熱中して読みました。でも、古い時代の歴史ものはあまり読んでないんですよ。

新田さんは歴史小説というより『孤高の人』などの山岳小説のイメージのほうが強いですね。ただ『八甲田山死の彷徨』もそうでしたが、生き

るか死ぬかの極限状況におかれた人間を描く力量は群を抜いていると思いますよ。

⑨ 池波正太郎「剣客商売」シリーズ

杉原道彦さん（新市町金丸）

語り口のうまさではこの人の右に出る人はいないんじゃないでしょうか。書き出しの一行から小説の世界へとすんなり入っていきます。まったくの虚構の世界ですが、自分が主人公になりきって読める小説はあんまりないと思います。秋山小兵衛、大二郎、三冬、傘徳など魅力的な登場人物が多く、何度読んでもまったく飽きません。とくに、清も濁も飲み込んだ小兵衛の自由闊達さ／青くさい勧善懲悪の話になっていないのがいいですね。

⑩ 水上勉「越前竹人形」

藤井誠さん（福山市引野町）

水上さんの小説は、古くからの日本の伝統的な世界を舞台に、女の中にある秘められた思い／女の情念／を赤裸々に描いたものが多いと思います。女性が主人公ですが、女を語るということとは、同時に男を語ることもなると思えますね。この

『越前竹人形』も女竹細工師の生き方をしなやかな文体で表わしたものです。水上さんが書くと、心にしみわたる感じで、何故か納得させら

れるんですよ。『五番館夕霧楼』しかり『金閣寺炎上』しかりです。

⑩ 津本陽「天下は夢か」

瀬良泰三さん（福山市野上町）

信長を主人公にした小説はたくさんありますが、これが一番おもしろかったですね。実は『下天は夢か』は単行本では読んでいないんですよ。日経新聞に連載されていて、ね、はやく次が読みたいという感じで、毎朝新聞を開くのが楽しみでした。とにかく信長の内面に深く切り込んだ心理描写が巧みで、今までにない信長像を造り出すのに成功しています。津本さんの作品のベストですね。

アンケートの結果をもとに、本好きに集まっていたいただいて新春特別座談会を開催しました。題して

『わしゃ何がなんでも
これが好き！』

なお、文中の発言者は以下の通りです。

A 平田恵彦さん（司会）

B 田口義之さん／C 佐藤秀子さん

D 赤松雅子さん／E 今村武美さん

F 山口哲晶さん／G 木下和司さん

☆記録・文責は木下

（一月七日 明治町「樹林」にて）

A 皆さん、本日はご苦労様です。これから新春恒例のアンケート座談会を始めさせていただきます。では、最初に皆さんお薦めの五人の作家について一言ずつお願いします。まず、会長からお願います。

B 歴史小説と言えば、まず司馬遼太郎かね。このひとの小説はどこまでが史実で、どこまでが創作かわからんじやろう。時代小説だったら吉川英治かな。それと最近日の出の勢いの津本陽、この人は司馬遼太郎の後を継ぐと思うよ。あと二人あげえ言うたら宮本昌輝じゃったかなあ、「剣豪將軍義輝」、これは良かった。最後は個人的趣味じゃけど子母沢寛、江戸の風情出てたが昔好きじゃったよ。こんなところかなあ。

A この前聞いたのと、ちょっと違うんじゃない。

B まあええじゃないか。この前のことはもう忘れた。

A 次は、佐藤さんお願いします。

C 私は、井上靖の『天平の甍』、それとここには無いけど国定忠治を書いた菊地寛の『入れ札』が好きです。あと好きな人は、遠藤周作それから水上勉、吉村昭なんかも好きです。こんなところで。

A どうも、じゃあ次は、赤松さん、

どうぞ。

D 最近読んだばかりで印象が強いんですが、辻邦夫の『西行花伝』に感動しました。西行の伝記だけでなく時代背景がものすごくよく書かれているんです。平安時代のおわりの律令制の壊れていくようすが詳しくかかれていてとても勉強になりました。それから朝日新聞で読んだんですが、吉村昭の『天狗党騒乱』ですか、それから遠藤周作の『女』、ああいうの感激しました。ええ、それから梅原猛、この方、民俗学者ですか。

A 哲学者です。そもそもは。

D この方の歴史の見方ですか、小説家と学者の間くらいの感じですか、面白く思いました。

A 以上ですか。じゃあ、今村さんお願いします。

E 一番は司馬遼太郎をあげとるんですが、これは文句なしじやろうと思ひよるんです。二番に陸奥一郎をあげとるんです。もう少し多いかなあと、思ひよったんですが、以外と少ないかなあと言うのが感想ですね。この人の最初の『吉原御免状』がでた時はすごい作家がでてきたなあと思ひよったんですが、三年ほどで亡くなりましたからねえ。残念です。三番目に、

池波正太郎をあげとるんですが。

この人の小説で好きなのは、食事の場面が本当に旨そうに読めるんですよね。

C そうそう。

E 食べ物の描写とかね。

A 食通で有名ですからね。

E 梅安シリーズの食事の場面なんか非常にいいなあ、思うとるんです。四番目に戸部新十郎を書いたのかなあ。これがほとんど無いのが意外なんですけども。お薦めは光文社文庫の『服部半三』ですねえ。五番目に藤沢周平をあげとるんです。平田さんが暗いいうていわれよったんですが、最近では暗さが抜けてきよって筆が枯れて来ているんじゃないですかね。

A 以上ですか。次は山口さんお願いします。

F 私は、普段歴史小説はあまり読まないんですが、読んだ本の中に遠藤周作の『沈黙』があつたんであげました。現代小説や随筆の方をよく読むのでこの中にはあまり好きな人はいないんですが、強いてあげるとすれば、南条範夫の『戦国残酷物語』ですかね。後は書いていませんですが、この中では梅原猛さんが好きです。本当は哲学者なんですが、専門家と違って歴史を

見る視点が面白いなあと思ひながらいつも読んでいます。

A 次は、木下さん。

G 私が歴史小説を読み始めたのは吉川英治さんの『三国志』からで、この本の面白さに引かれて歴史ものを読むようになりました。次に、読んだのが司馬遼太郎の本なんです。この人の小説の書き口は非常に透明な感じがして好きなんですけど、どうも晦渋が無いと言うか癖が無いところが不満です。次は会長が先ほど言われた子母沢寛の『おとこ鷹』『親子鷹』が、幕末の江戸の風情がでていて好きです。最後が私だけがあげている阿川弘之さんです。終戦の三部作『米内光政』『山本五十六』、ええ、もう一人、誰だったかなあ。

B 『井上成美』

G そうです。その中で人物として、米内光政が一番好きなのでここにあげました。

A では、最後に私も言わせて戴きますと、司馬遼太郎はやっぱりどうしても、一番じゃないんですが、あげざるをえませぬ。司馬遼太郎の作品の中で一番好きなのは小説じゃなくて『街道を行く』です。小説の中では、『竜馬が行く』を最初に読んで、竜馬の人間像に憧

れを感じました。小説の書き方について木下さんが晦渋がないと言われましたが、歴史小説を書くようになって客観描写が行きすぎたかえって嫌味な感じがします。特に明治維新ものなんかでは、なんでも「この男は」と言うふうに切り捨てるように言うでしょう。

B 断定するんだよ。

A 維新の頃の人々に対する書き口は厳しすぎる様に思います。個人的に好きな作品は、幕末の松平容保を描いた『王城の守護者』です。

それから時代小説では、熱烈な池波正太郎のファンです。語り口の面白さは群を抜いています。特に、『剣客商売』の圧倒的ファンです。

それから、今村さんも共通していますが、隆慶一郎が群を抜いて面白くて、本当にわずか数年の間だけ登場して、あっと言う間に消えて行ったという感じですが、長生きしてもらいたかったと思います。『吉原御免状』『捨て童子松平忠輝』どれを取っても素晴らしい作品だと思います。よくとってはここ数年で池波正太郎、隆慶一郎が死んでしまったことは、小説の読み手としてはほんとうにおしいなあとおもいます。

A 次にですね。この順位をみてどう

思いますか。

B 妥当なところじゃないかなと思うけど、永井路子が上のほうにいるからびっくりしたよ。

A はとんどやっぱり女性の方なんですよね。永井路子、杉本苑子を書かれた方は、女性の方が圧倒的に多いです。

B ぼくはあまり好きでないんでね。

A ぼくも好きでないというより、印象に残ってないんです。

D あの、津本陽さんの本はものすごく史料が詳しいですね。

B 津本陽の場合、信長のなんかを見ると、ええどこかかの医者蔵から出て来た本、

A 『前野家文書』

B そうそう、あれをものすごく使ってるよね。

A 最近書かれた信長・秀吉関係のいやたら使われてますよ。

B 津本陽の特徴なのは名古屋弁で書いてあるんだよね。

D そうそう、家康なんかが。

A ところで、井上靖は歴史小説作家というふうなイメージじゃないですよ。どっちかと言うと。

D 『蒼き狼』なんか、昔はよく読みましたけど。

A いわゆる中国ものですよ。それがいまだに根強い人気があると言

うのが意外でしたよね。

D あの、藤沢周平の短編いうの面白いでしょう。山本周五郎にちょっと似ているようで、割合、善人が出てきて。私、好きなんです。

A 一般の庶民がでてきて、でもトンがちょっと暗いですね。

B でも、それぞれ作家の性格があるね。山岡荘八の小説いうんは、ぼくはあまり好きじゃないな。なんでもいのように書くじゃろ。

B ところで、松本清張が第三位じゃろ。どんな作品を読んでいる。

A ぼくが読んだ中でだんとつの一位は『西海道談綺』だと思う。

B いやいや、アンケートのなかは。

A 作品名を書いていないことが多いねえ。推理小説を書いている場合もある。

B ぼくは松本清張の『昭和史発掘』いうんがあるでしょ。あれがすごいなあ。

A あれは小説ではないでしょう。あと『古代史私注』も、歴史解説書ではあるけれど、

G でも、調べていることはものすごく細かいですよ。

A そうそう。

E あの、『古代史私注』にしろ、『密教の源流を探る』にしても、推理小説の文体と全然違うでしょ

う。推理小説の文体は、面白いけど、こういうのは面白くも何ともないでしょう。

A 書き方は専門書に近いですよ。B どうなんじゃろかなあ。我々は歴史好きの集まりでしょう。一般の人でアンケートを取ったら一致するんじゃないか。

A 歴史・時代小説作家で取ったら。一、二位は変わらないんじゃないかなあ。多分。あとはかなり変わると思う。池波正太郎・黒岩重吾・宮尾登美子とかは、もつと上位にくるんじゃないかなあ。

E 隆慶一郎もそうでしょう。

B これからどういいう人が読まれるんじゃないか。

A 今は、過渡期だと思うんだけど、池波正太郎が死んで、司馬遼太郎が十年ぐらい書いてないんで。

E 司馬遼太郎は小説を書く体力はないといってますよ。

A 北方謙三、小松重男、宮部みゆき何かが若いですけど、歴史小説は年齢が行かないと書けないんじゃない。知識の集積が必要になるから。これから伸びてくる人達に期待したいと思います。

※座談会はまだまだ続きますが、この辺で終わらせて戴きます。

期待したいと思います。

※座談会はまだまだ続きますが、この辺で終わらせて戴きます。

期待したいと思います。

福山文化賞 受賞記念行事開催

一月二八日(日)一連の福山文化
賞受賞記念行事が実施されました。

まず、午後二時より、広島県立歴史博物館講堂で、西口和彦先生(兵庫県埋蔵文化財事務所調査第一班長)による講演「考古学における物理探査―ハイテクで地中を探る―」が開催され、会員・一般参加を含め、約九〇名が参加しました。

その後、午後五時四十分よりサンピア福山で、来賓・会員六八名が出席して福山文化賞受賞祝賀会兼新年会が挙行されました。
式次第等は以下の通り。

- 一、開会の辞 司会 馬屋原亨
- 一、会長挨拶 田口義之
- 一、来賓祝辞
 - 池口義人福山市教育長
 - 高橋享県立歴史博物館館長
- 一、祝宴開始 乾杯の首領
 - 門田峻徳福山市教育委員長
- 一、『備後ゆかりの歴史人物伝』出版披露 司会
 - 花束贈呈 上原寿美子
 - 出版への祝辞
 - 岩本正二草戸千軒町遺跡調査研究研究所長

- 一、謝辞 田口義之
- 一、来賓祝辞
 - 三好章福山市長
 - 河相典男義倉理事長
- 一、閉会の辞 中村勤史

なごやかな雰囲気の中、たがいに受賞を喜び、今後のいっそうの精進を誓い合いました。

平成八年度総会開催

一月二八日(日)記念行事に先立ち午後四時四〇分から、サンピア福山で平成八年度備陽史探訪の会総会が開催されました。

冒頭、田口会長が、福山文化賞受賞を弾みにして今年度も活動をいっそう充実させていく決意を発表。続いて亀井勇さんを議長に選出し、議事に移りました。

平成七年度活動報告、同決算報告、同監査報告と続き、いずれも了承されました。
引き続き、平成八年度活動計画、同予算案、役員の改選が発表され、すべて承認されました。
議長解任後、馬屋原副会長が閉会の辞を述べ、午後五時三五分終了しました。
なお、総会で承認された主な内容は次に掲載いたします。

備陽史探訪の会役員改選

総会において新役員(任期二年)が次のように決定されました。

- 名誉会長 神谷和孝
- 会長 田口義之
- 副会長 山口哲晶、中村勤史
- 馬屋原亨

参与 中西晃、末森清司、後藤匡史

佐藤洋一、種本実、栗田英夫

事務局長 七森義人

事務局員 佐藤秀子、佐藤錦士

(歴史民俗研究部会)

部会長 神谷和孝 副 平田恵彦

(古墳研究部会)

部会長 山口哲晶 副 網本善光

(城郭研究部会)

部会長 出内博都 副 杉原道彦

①以上の役員は留任

②新任役員

柿本光明、広川茂夫

(以上二名参与)

寺崎久徳、木下和司、日野雅友

(以上三名事務局員)

★監査委員 藤井忠夫、杉原外志子

(留任)

☆退任 金永真澄、井上良三

平田恵彦(以上三名事務局)

長い間ご苦労様でした。

平成八年度 会報・行事案内発送計画

- 1/6(土) 行事案内
 - 7/森・山口・佐藤錦士・平田が発送
 - (「古事記」を読む終了後作業)
 - 2/17(土) 会報69号
 - (「中世を読む」終了後作業)
 - 3/9(土) 行事案内と「山城志」
 - 第13集
 - 4/20(土) 会報70号
 - (「中世を読む」終了後作業)
 - 5/18(土) 行事案内
 - (「中世を読む」終了後作業)
 - 6/8(土) 会報71号
 - (「古事記」を読む終了後作業)
 - 7/13(土) 行事案内
 - (「古事記」を読む終了後作業)
 - 8/3(土) 会報72号
 - (「古墳講座Ⅲ」終了後作業)
 - 9/7(土) 行事案内
 - (「古墳講座Ⅲ」終了後作業)
 - 10/5(土) 会報73号
 - (「古墳講座Ⅲ」終了後作業)
 - 11/9(土) 行事案内
 - (「古事記」を読む終了後作業)
 - 12/7(土) 会報74号と「山城志」
 - 第14集
 - (「古墳講座Ⅲ」終了後作業)
- ☆都合により日程を変更する場合がありますのでご了承下さい。

平成7年度活動報告

郷土史講座・シンポジウム・講演会

日程	講座内容	講師	会場	参加数
1/29(日)	特別郷土史講座 『古墳の再利用』	間壁茂子	遺族会館	52名
2/25(土)	第2回郷土史講座 『巨大古墳の謎を探る-三ツ城古墳を中心として-』	網本善光	市民会館	37名
3/26(日)	第3回郷土史講座 『備後国太田荘を巡る闘い 平重衡から上原元村まで』	田口義之	中央公民館	47名
4/22(土)	第4回郷土史講座 『文献から見た古代の戦い』	七森義人	中央公民館	36名
5/20(土)	第5回郷土史講座 『万葉と瀬戸の旅人』	平田恵彦	市民会館	28名
5/27(土)	創立15周年記念講演会 『考古学から見た中世城館』	中井均	広島県立博物館講堂	約230名
6/24(土)	第6回郷土史講座 『福山の古建築』	川崎雅博	中央公民館	49名
7/22(土)	第7回郷土史講座 『戦国武将入江氏について』	杉原道彦	中央公民館	28名
8/6(日)	シンポジウム 『暴れん坊将軍の実像に迫る』	田口・出内・小林・後藤	市民会館	16名
9/30(土)	第8回郷土史講座 『古代深津市の謎に迫る』	柿本光明	中央公民館	37名
10/28(土)	第9回郷土史講座 『積石塚の謎を探る』	山口哲晶	中央公民館	18名
11/25(土)	第10回郷土史講座 『地名が語る郷土の歴史』	出内博都	中央公民館	32名
12/16(土)	特別郷土史講座 『県内の埋蔵文化財研究』	篠原芳秀	中央公民館	30名

☆総会(1/29)には61名が参加。

バス・徒歩例会・古墳巡り・1泊旅行

日程	行事内容	講師・担当	参加数
3/19(日)	バス例会 『憧れの白旗城に挑戦する-赤松氏の史跡巡り-』	七森・杉原	53名
4/16(日)	バス例会 『中世太田荘の残像-今高野山に春霞たなびく-』	田口義之	62名
5/5(金祝)	第13回親子の古墳巡り 『神辺町～加茂町を歩こう』	山口・網本・篠原	約130名
6/11(日)	バス例会 『古代吉備不思議旅-鹿山遺跡を中心として-』	種本・平田	65名
7/16(日)	バス例会 『ある晴れた日の膳山は森の中にたざむ』	神谷・平田	54名
9/17(日)	徒歩例会 『木之庄町・本庄町の史跡巡り-さきやかなプレゼントをあなたに-』	中村・出内	約90名
10/14・15(土日)	1泊旅行 『秋天に戦国の残光を求めて-道江・越前の旅-』	旅行委員	43名
11/19(日)	秋の古墳巡り 『積石塚の謎を解く-石清尾山古墳群を中心として-』	山口・網本	55名
12/3(日)	徒歩例会 『蔵王町の史跡巡り-古代深津市の謎に迫る-』	田口・柿本	64名

定期講座

①毎月第1土曜日	『古墳講座』	古墳研究会	網本善光	中央公民館
②毎月第2土曜日	『古事記』を読む	歴史民俗研究会	神谷・平田	中央公民館
③毎月第3土曜日	『備後古城記』を読む	城郭研究会	出内博都	中央公民館・市民会館

城郭研究部会活動報告

①月例研究会「中世を読む会」

第三土曜日午後七時から中央公民館で開催。「備後古城記」を読む。一書精読。一〇名〜一八名参加。

②郷土史講座担当

中央公民館会議室で開催。

7/22(土)「戦国武将入江氏について」 杉原道彦

11/25(土)「地名が語る郷土の歴史」 出内博都

③「山城探訪」発行のための執筆

前年度の調査を元に次の山城について執筆した。「青ヶ城」「的場山城」「掛迫城」「矢栗城」「丸山城」「木之上城」「沼隈の山城一覽表・分布図」「山城関係用語解説」以上出内博都。「石屋原城」「大石城」以上杉原道彦。

④バス例会 3/10「憧れの白旗城に挑戦するー赤松氏の史跡巡りー」

講師 杉原道彦・七森

⑤徒歩例会「本庄・木之庄の史跡巡り」

9月17日(日)の講師担当。約九〇名が参加し、大盛況となった(出内、中村、鎌田)。

⑥勝山例会と一泊旅行の補助

勝山までの道中及び浅井・朝倉氏についての資料を作成、解説を担当した(出内)。

古墳研究部会活動報告

①第13回「親と子の古墳巡り」

5/5担当。神辺の古墳。参加は約一三〇名。

②郷土史講座担当

網本善光「巨大古墳の謎を探るー三ツ城古墳を中心としてー」 山口哲晶「積石塚の謎を探る」

③第7回「秋の古墳巡りー積石塚の謎を探るー」担当(11/20)。石清尾山古墳群等を探訪。

④「古墳講座」毎月第一土曜日

網本・山口 中央公民館 毎回八名〜一五名が参加。

⑤掛迫六号古墳測量調査(下草刈り、斜距離測定、角測定、平板測量)

①郷土史講座担当 中央公民館 第五回(5/27)「万葉と瀬戸の旅人」平田恵彦

②9/11 バス例会「ある晴れた日の勝山は森の中にたたずむ」

講師担当 神谷・平田 謎に迫る」柿本光明

③毎月第二土曜日「古事記」を読む

中央公民館。二〇名〜三〇名参加 神谷和孝・平田恵彦・柿本光明・門田幸男が講師。

城郭研究部会活動計画

①月例研究会「中世を読む会」第三

土曜日午後七時から。中央公民館で開催。「備後古城記」を読む。今年も継続してやっていく。

②郷土史講座担当

6/29(土)「備後における福島正則の足跡」 杉原道彦

9/28(土)「毛利の備作進出と秀吉」 出内博都

③笠岡の山城調査実施

一年間休止していた山城調査を再開する。笠岡北部の山城調査を実施し、それをもとにシンポジウムなどを実施することを考えている。

④バス例会担当

バス例会「東城町の史跡めぐりー五品岳城に針路をとれー」

古墳研究部会活動計画

①掛迫六号古墳測量調査(平板測量と報告書の作成)

物理探査は大成功のもとに終了することができた。これに負けないように平板測量を完成させたい。予定よりも測量範囲が大きくなったので、三月以後も継続して測量を実施する。古墳巡りまでにはなんとか完成させたいが…。

②第14回「親と子の古墳巡り」5/

5担当。加茂町から駅家町の古墳。今年も福山市との共催にするようにしたい。

③郷土史講座担当

4/27(土)「吉備の巨大古墳の謎ー吉備王権は存在したかー」 網本善光

10/26(土)「瀬戸内沿岸の古墳ー見晴るかす海峡の支配者ー」 山口哲晶

④第七回秋の古墳巡り担当(11/10) 「吉備の弥生墳丘墓を探る」

⑤「古墳講座Ⅲ」毎月第一土曜日

四月からパートⅢを開始。

①郷土史講座担当 5/25(土)「福山の神社信仰」 神谷和孝

7/27(土)「中世の建築ー明王院と浄土寺を中心としてー」 木下和司

②バス例会担当 7/14(日) 「岡山の旧住宅を訪ねてー輝きはいまも消えずー」神谷・平田

③毎月第二土曜日「古事記」を読む 中央公民館会議室。最強を目指して今年もしっかりとやっていく。

④加茂町の石造物分布調査 今年も春から準備に入り、秋から本格的な調査に移りたい。

平成8年度活動計画

日程	講座内容	講師	会場
1/28(日)	受賞記念講座「考古学における物理探査-ハイテクで地中を探る-」	西口和彦	県立歴史博物館講堂
2/24(土)	第2回郷土史講座『松永の歴史-馬取貝塚から本庄重政まで-』	田口義之	中央公民館
3/30(土)	第3回郷土史講座『古代ののろしについて』	七森義人	中央公民館
4/27(土)	第4回郷土史講座『吉備の巨大古墳の謎-吉備王権は存在したか-』	網本善光	中央公民館
5/25(土)	第5回郷土史講座『福山の神社信仰』	神谷和孝	中央公民館
6/29(土)	第6回郷土史講座『備後における福島正則の足跡』	杉原道彦	中央公民館
7/27(土)	第7回郷土史講座『中世の建築-明王院と浄土寺を中心として-』	木下和司	中央公民館
8/未定	講演会またはシンポジウム	未定	未定
9/28(日)	第8回郷土史講座『毛利の備作進出と秀吉』	出内博都	中央公民館
10/26(土)	第9回郷土史講座『瀬戸内沿岸の古墳-見晴るかす海峡の支配者-』	山口哲晶	中央公民館
11/30(土)	第10回郷土史講座『長和庄の長井氏について』	小林定市	中央公民館
12/21(土)	特別郷土史講座 未定	未定	未定

☆都合により日程・会場が変更になる場合があります。

バス・徒歩例会・古墳巡り・1泊旅行

日程	行事内容	講師
3/10(日)	徒歩例会『松永湾の史跡めぐり-旧山陽道を中心に-』	田口・坂本
4/14(日)	バス例会『東城町の史跡めぐり-五品岳城に針路をどれ-』	出内博都
5/5(日祝)	第14回親子の古墳巡り『加茂町～駅家町の古墳を歩こう』	山口・網本・藤原
6/9(日)	バス例会『因島の史跡めぐり-村上水軍の光と影-』	木下・日野
7/14(日)	バス例会『岡山の旧住宅を訪ねて-屏きはいも消えず-』	神谷・平田
9/8(日)	バス例会『井笠なぞ不思議旅-バスのことではありませぬ-』	後藤・七森
10/19・20(土日)	1泊旅行『西の京 山口の旅-大内氏と毛利氏の盛衰-』	旅行委員
11/10(日)	秋の古墳めぐり『吉備の弥生墳丘墓を探る』	山口・網本
12/8(日)	徒歩例会『水呑町の史跡めぐり-隠れた水呑を訪ねて-』	田口・小林

☆都合により日程・コースが変更になる場合があります。

定期講座

①毎月第1土曜日	『古墳講座Ⅱ・Ⅲ』	古墳研究会	網本善光	中央公民館
②毎月第2土曜日	『古事記』を読む	歴史民俗研究会	神谷・平田	中央公民館・市民会館
③毎月第3土曜日	『備後古城記』を読む	城郭研究会	出内博都	中央公民館

☆都合により会場が変更になる場合があります。

平成年7度支出入決算報告					
勘定項目	収入額	摘要	勘定項目	支出額	摘要
会費	659,000	237名(17組)	会報印刷費	216,480	
	内訳		行事業内印刷費	22,600	
	3,000×187=561,000		『山城探訪』印刷費	1,318,400	
	2,500×2=5,000		『山城志』印刷費	*0	原稿遅れのため間に合わず
	2,000×8=16,000		通信費	261,840	切手代等
	1,500×6=9,000		部会活動費	83,768	主に古墳測量費
	4,000×17=68,000		記念行事実施経費	171,319	講演料・宿泊費等
雑収入	1,062,948	書籍販売等	一般経費・雑費	229,241	事務費・義援金等
銀行利息	11,454				
繰越金	896,465	(賞金50万含む)	繰越金	326,219	
総計	2,629,867		総計	2,629,867	

監査の結果、上記の通り相違ないことを承認します。

監査委員 藤井忠夫、杉原外志子(印)

平成8年度予算案				
収入の部			支出の部	
項目	予算額	摘要	項目	予算額
会費収入	630,000	3000円×210人	『山城志』印刷費	500,000
	60,000	4000円×15組	会報『備陽史探訪』印刷費	200,000
雑収入	370,000	書籍販売など	行事業内印刷費	20,000
繰越金	326,219		郵送・通信費	300,000
			城郭研究部会活動費	30,000
			古墳研究部会活動費	30,000
			歴史研究部会活動費	30,000
			記念行事費用(講演料等)	100,000
			一般経費・雑費	150,000
			予備費	26,219
総計	1,386,219		総計	1,386,219

*別途に特別積立金300000円があります。

事務局日誌

二月二日(土)古墳講座Ⅰ「騎馬民族の謎を探る」参加一〇名。

二月三日(日)徒歩例会「古代深津市の謎に迫る」実施。講師は柿本光明さんと会長。参加六二名。初冬の蔵王の美しさを堪能する。

二月九日(土)『古事記』を読む開催。参加二三名。門田幸男さんが講師を担当。易および陰陽五行説と『古事記』の関係について熱弁をふるう。

二月一〇日(日)掛迫六号古墳測量。参加一六名。

二月一六日(土)正午より役員会。出席一二名。測量調査と福山文化賞受賞記念行事のことについて話し合う。

午後三時～五時、特別郷土史講座。講師は篠原芳秀さん。参加三〇名。演題は「県内の埋蔵文化財研究」でスライド上映を交えて解説。

午後六時～八時、忘年会。狂気の如く盛りあがる。於サンピア福山会費六〇〇〇円は絶対に安いぞ。参加は五四名。

★八時半から忘年会二次会。明治町の「寿」で三〇人以上が参加してこれまた深夜まで盛り上がる。みんなが帰る頃藁田氏登場。馬鹿話

を閉店の一時まで。怒っていわく「最近ではみんなはよう帰るようになったのう」

二月一七日(日)掛迫六号古墳測量。参加一三名。忘年会の翌日でもとにかく頑張る！年内の行事はこれにて終了。

一月一日(元旦・月)掛迫六号古墳測量。参加は篠原さん、佐藤錦士さん、平田さん。正月の早朝からご苦労さまでした。

一月六日(土)午後七時から行事案内発送作業。参加山口さん、七森さん、佐藤錦士さん、平田さん。

一月七日(日)新春特別座談会「わしゃ何がんばんでもこれが好き」開催。参加七名。於喫茶「樹林」。

一月一三日(土)『古事記』を読む講師は佐藤壽夫さん。参加三一名。この日は佐藤さんの誕生日。講師をしていい記念になったとのこと。

★七時から役員会。参加一三名。記念講演会、祝賀会の段取り等について話し合う

一月一四日(日)掛迫六号古墳測量。参加九名。午前中雨になり、参加メンバーで加茂公民館で学習会。

午後から測量再開しました。雨。一月一五日(月・祝)特別古墳講座発掘考古展95姫路見学会。参加は一五名(別に回生病院の方が一〇

名合流)。また田中君が京都からかけつけてくれた。姫路市網干区にある瓢塚(前方後円墳)と丁古墳郡も見学。

一月二〇日(土)『備後古城記』を読む。参加一七名。宮氏の出自について学習する。

一月二一日(日)掛迫六号古墳測量。参加一五名。中学三年生の田頭さんが参加する。

一月二四日(水)中国新聞が掛迫六号古墳物理探査実施を大きく報道。一月二六日(金)午前一時、西口先生来福。ホテルで休息後、さっそく掛迫六号古墳へ下見に。金属探査を実施。参加、田口会長、中村副会長、篠原さん、平田さん。

★読売新聞、山陽新聞が掛迫六号古墳物理探査実施を大きく報道。

★午後七時半、福山ワシントンホテルで西口先生と翌日の打ち合わせ。参加は田口会長、篠原さん、七森さん、出内さん、網本さん、平田さん。

一月二七日(土)掛迫六号古墳の電気探査実施。各新聞社、NHK、RCCなどが取材に。参加四〇名。

★昼、夕方のニュースでNHKが、夕方のニュースでRCCが報道。一月二八日(日)各新聞社、掛迫六号古墳の電気探査実施を報道。

★午後二時から広島県立博物館講堂で記念講演「考古学における物理探査―ハイテクで地中を探る―」開催。参加約九〇名。

★午後四時四〇分からは、サンピア福山で平成八年度備陽史探訪の会総会を開催。参加五七名。

☆特記がない時の会場は中央公民館。

新入会員紹介

CONFIDENTIAL
備陽史探訪の会
個人情報が含まれるため掲載できません。

三月徒歩例会

松永湾の史跡巡り

旧山陽道を中心に

今年の例会初めは徒歩例会から、歴史豊かな松永湾の史跡を巡ります。現在は陸地化していますが、松本古墳や「お剣さん」の伝説の残る式内社高諸神社は、かつて海岸沿いにありました。

今回は松永の主な史跡をじっくり見学します。うららかな春の日差しを浴びながらのんびり歩きましょう。

★主な探訪コース

- ① 松本古墳 帆立貝式古墳
- ② 神村八幡神社 古志氏所縁の神社
- ③ 今津宿・一里塚 近世の宿駅
- ④ 薬師寺 真言宗の古刹
- ⑤ 本陣河本家 剣大明神の社家も
- ⑥ 蓮華寺 剣大明神の別当寺
- ⑦ 高諸神社 式内社。磐境が残る。
- ⑧ 松永塩田 本庄重政の開発
- ⑨ 塩商社跡「月本松永塩」の販売元

▲実施要項

日程 三月一〇日(日)★小雨決行
 集合時刻 午前九時(集合完了)
 集合場所 松永駅北口前
 ★参考 JR時刻表
 福山発 八時三七分 松永着四六分
 三原発 八時二〇分 松永着四二分

参加費用 五〇〇円

(現地往復までの交通費は各自負担) 申込受付 二月一九日(月)から

事務局までハガキか電話で。

定員はありませんが、資料印刷の関係上必ず申し込んでください。

講師 田口義之会長、坂本敏夫さん
その他 弁当・飲物持参。

スニーカー(運動靴)着用のこと。

第二回郷土史講座

松永の歴史

馬取貝塚から本庄重政まで

今年度最初の郷土史講座は、徒歩例会に合わせて、田口会長に「松永の歴史」についてお話いただきます。

とくに、神村庄や粟江庄あるいは沼隈の新庄を巡る問題点や、古志一族の興亡については、会長の最も得意とする分野だけに興味深い話になることは間違いありません。

松永湾の史跡巡りご参加される方はもちろんのことそうでない方もぜひご参加ください。

▲実施要項

日程 二月二四日(土)
 時刻 午後一時三〇分～四時
 会場 中央公民館会議室
 講師 田口義之会長
 参加費 一〇〇円程度(資料代)

第三回郷土史講座

古代の「のろし」について

弥生時代の高地性集落は瀬戸内沿岸に多く見られますが、明確に「のろし」の痕跡を残した遺跡は未だ発見されていません。

しかし、奈良時代に「とぶひ(のろし)」が、突然出現したとは考えづらく、何らかのつながりをたどることができないのではないのでしょうか。

今回七森さんには、文献上(『風土記』)に現れる古代の「のろし」の謎とその意義についてお話いただきます。

▲実施要項

日程 三月三〇日(土)
 時刻 午後一時三〇分～四時
 会場 中央公民館会議室
 講師 七森義人事務局長
 参加費 一〇〇円程度(資料代)

平成八年度

会費納入について

会費を継続希望で今年度会費未納の方は、前回送付の振込み用紙を利用して早急にご納付下さい。また、会の行事の際にご持参いただいても結構です。

年会費は個人会員三〇〇〇円、夫婦・親子会員四〇〇〇円です。

会報70号原稿募集

『備陽史探訪』第70号の原稿を募集します。随筆、短歌、俳句、マンガ、歴史に関する小論など何でも結構ですが、原則として一つの号につき原稿は一本だけにしてください。

なお、予算上の都合や記述内容の問題で掲載できない場合があります。

タイトル・氏名別で、本文を縦書き一六字×(四〇〇)字原稿用紙の場合、下四字を空けて使用。厳守) 二四〇行以内で書いて下さい。

切りは三月二〇日(土)事務局へ。

編集後記

ご心配をかけたようですが、『山城志』13号の発送は三月初旬と決まりました。今しばらくお待ちください。

二年半の間、会報の編集を担当してまいりましたが、しばらくお休みをいただくことになりました。次号からは回り持ちで山口さん、国見さん、木下さんが編集を担当して下さいます。ではまたいつの日か。(磐座亭主人)

備陽史探訪の会事務局 ☎七二〇
 福山市多治米町五一一九一八
 ☎〇八四九(五三)六一五七